

2024年3月31日 主日礼拝／復活日（イースター）礼拝 復活節 第1主日

説教題：「主の復活を信じる人生」 聖書箇所：ルカによる福音書24章13-35節（160頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93 - 1 - 43 交読詩編：第67編1 - 8節（70頁）

讃美歌：83／328（ハレルヤ、ハレルヤ）／543（キリストの前に）／579（主を仰ぎ見れば）／27

「今週の聖句」〔二人の目が開け、イエスだと分かった…二人は、「道で話しておられるとき、
また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」
と語り合った。〕（ルカ伝24：31-32）

「牧師室の窓」「復活の 主に会うことを 望みつつ この世の旅路 迷い迷いつ」

「復活の 主の御姿に 出会いは 生きる勇気の 一歩となりし」

(1)皆様おはようございます。本日は主イエス・キリストが復活なされた復活日・イースターです。イースターおめでとうございます。イースターの日がクリスマスが毎年12月25日に確定しているのとは異なり、毎年変動します。お手元の週報に書きました様に、西暦1900年～西暦2100年までの200年間で最も早いのは3月23日であり、最も遅い日は4月25日です。この200年間でイースターが本日と同じ3月31日になるのは8回ありまして、次回のイースターが3月31日となる年は62年後の2086年です。そういう意味では、毎年のイースターは貴重な時なのです。私は51年前の3月に洗礼を受けて学校を卒業し4月に就職をしました。その年のイースターは4月22日でした。今でも、洗礼を受けた日と洗礼後の初めてのイースターの日の天気のこと鮮明に覚えています。イースターが確定日ではなく変動日であることによって記憶が刻まれてゆくのだと思います。

(2)イースターが何故変動日であるのかと言いますと、暦の基準が太陽暦ではなく、お月様の満ち欠けを基準とする太陰暦に基づいているからです。具体的に言いますと、「その年の春分の日のおすぐ後に来る満月の直後の日曜日」です。イースターの日が決まると、その50日後に聖霊降臨日・ペンテコステの日が決まります。今年は5月19日が聖霊降臨日になります。何故、お月様の満ち欠けを基準とする太陰暦が使われたのかと言いますと、一言で言えば、月の満ち欠けは分かり易いからです。分かり易いと言うことは、農業にも、お祭りの行事にも適しているからです。踏み込んで言えば、人間の体のリズムに適していると言えるでしょう。イースターと言う復活日は、春の訪れを示しています。人間の歴史の中で、季節の春は生命が再び与えられる恵みの時期であります。ですから、復活なんてあり得ない、馬鹿馬鹿しいなどと言うよりは、人間の歴史に思いを馳せ、聖書に隠されている神の愛に思いを馳せ、人間の知恵を掘り下げることが大切だと思います。聖書は信仰の書物であると共に、私たちに夢を持つこと、夢を描くことの楽しさを教えてくれる書物でもあります。馬鹿馬鹿しいと思われる奇跡物語の中にある真理は私たちに自由を与えてくれるのです。新約聖書のヨハネによる福音書8章に次のような言葉があります。〔(ヨハネ伝8:31)イエス

は、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。/(8:32) あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」私は信徒時代に職業人として多くの人たちと会ってきました。特に会社の経営者の方々とは、仕事上の、商売上の話だけではなく、生き方なり、信じる宗教についても踏み込んで話を聞くことがしばしばありました。信仰はその人が苦難の時にその人の心を支えてくれる、その実話を数多く耳にしました。

(3)前置きが長くなりましたが、ルカによる福音書の最終章である24章はイエス・キリストが復活されたことを3つの場面から伝えています。最初の場面は岩場をくり抜いたお墓での出来事であり、2番目はエルサレムからエマオへと60スタディオン（約11kmです）の移動中での出来事であり、3番目は弟子たちが意気消沈して集まっている場所での出来事です。今日の聖書箇所は、その内の第2番目の場面に復活されたイエス様が表れたお話しです。先程、朗読されました。やや長い文章になっています。併し、この箇所での重要な言葉は2つのみです。それは、1つには16節に書かれている「しかし、二人の目は遮られていて」であり、もう1つは31節に書かれている「すると、二人の目が開け」であります。何故ならば、私たちの日常生活の中でも、私たちの人生でも「目が遮られている」ことが多くあることに注意しなければなりません。眼を開いて見ている様でも目が遮られていることを今日の聖書箇所から学ぶことができるでしょう。…私事ですが、先日、息子のファミリーが数年振りて我が家にやってきました。海外勤務から帰国して首都圏から遠く離れた場所の自宅に戻りましたが、コロナ禍で会うことができませんでした。中学3年生の孫の高校受験が終わり、この4月に高校に進学することになり、その報告を兼ねて漸く会うことができました。進学祝いとしてお祝い金をあげました。そのほかに辞書をプレゼントしました。辞書を使って生きて行く力を養ってほしいとの願いからです。日本の社会の将来は、人口が大きく減少します。食料自給率が益々低下する中で、資源の乏しいこの国で「目が遮られることなく、目を開けて」生きて行かねばならないのです。生きる力とは何でしょうか。これからの教会は、キリスト教はそのことを人々に語り掛けて行く使命と責任があると私は思っています。

(4)13節に「(ルカによる福音書24:13)ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、」と書かれています。「ちょうどこの日」とは、イエス・キリストの遺体が納められていた横穴式の空洞型のお墓でよみがえられた日と同じ日、日曜日のことです。二人の弟子の一人の名前は18節にはクレオパと書かれています。二人は何らかの用事があって、エルサレムから11kmほどの距離にあるエマオ村に行く途中でした。イエス様の遺体が無くなっており、復活されたのではないかとこの憶測にペトロなどの弟子たちや婦人たちが混乱している、その状況についてこの二人は話しながら道を歩いていました。二人の話し声は大きく、夢中になって話していたのでしょう。イエス様が「近づいて来て、一緒に歩き始

められ」ましたが、16節には「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」と書かれています。今日のこの聖書箇所と並行して書かれているのはマルコによる福音書に僅か4行のみが書かれています。そこには「イエスが別の姿でご自身を現された」と書かれています。「別の姿」になっていると誰もがイエス様であるとは分からなくなってしまう。ロシアの小説家であるトルストイが書いた本に「愛あるところ神あり」と言う短編小説があります。その中に「靴屋のマルチン」の物語があります。教会学校でクリスマスの劇にしばしば登場するあの「靴屋のマルチン」です。キリストが様々な姿で表れますが、マルチンは温かくもてなすのです。私は学生時代にロシア語を学びました。ロシア語を選択した学生は10人ほどであり、授業中には目を閉じることも出来ず、今でも夢の中でうなされることがあります。…今日の聖書箇所には「二人の目は遮られていて」と書かれています。私は職業人時代に、先輩や上司から「表面的なことや、数字上のことで目を遮られてはならない」と教えられました。「見掛けて判断するな、本質を見抜きなさい」との教えです。ですから、「細かいことには目を囚われるな、併し、細かいことを見過ごすな」と教えられたのです。先輩たちには今でも深く感謝しています。

(5)「目を遮られていた」二人の弟子と復活されたイエス様との会話が続きます。一人の弟子のクレオパがイエス様とはどんな人であったのかを話します。そして、イエス様の十字架の死と復活とを語っていくのです。考えてみますと、実に面白い構図ですね。イエス様ご自身を目の前にしてイエス・キリストを語っているのです。どうしてでしょうか。何故でしょうか。私が思いますのには、この箇所は、ルカによる福音書を読む人々、即ち、ギリシャ文化に親しんでいた人々や、パウロを中心とした初代キリスト教会にとっては、ひとつの信仰告白であったと考えられます。抑々、ルカによる福音書が書かれた目的が第1章に書かれています。1章3節には次の様に書かれています。〔(1:3) そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。〕

加えて、よく読んでみますと、クレオパがイエス様の人となりと、遺体が納められていた墓にはイエス様の遺体が無くなってしまったという、これまでの事実を話すと、25節からは、旧約聖書のメシア（救い主）のことが語られるのです。ギリシャ文化に親しんでいる人々に、（私たちが旧約聖書と呼んでいるその）聖書に記されているメシアとはイエス様であると、そうです、これは信仰告白そのものと言っても良いでしょう。つまり、「目を遮られていた」ことの中身とは、イエス・キリストはメシア（救い主）であることをしっかりと理解しなさいと言っているのです。では、25節～27節を読んでみますのでお聞きください。〔(24:25) そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、/(24:26)メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」/(24:27)そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明され

た。〕ここに書かれていることは、イエス様の生前のお姿や物語への思い出だけではなく、主の復活を信じる人々が集まり始めていたことを示しています。すると、どうなるのでしょうか。イエス様が過去の一時期に生きておられた人ではなく、永遠に生きるお方であり、当時の時代に生きる人々と共に生きる救い主となられたのです。と言うことは、現代に生きる私たちにも、主の復活を信じる人生が与えられた、保証されたのです。「保証」については、私は信徒時代に法律上の実務を体験しました。保証とは、人間の集団的社会生活の歴史の中で生み出された知恵であります。その知恵が、神と人間との関係では、信仰と恵み（保証）と言う相互信頼となり、詩編はこの相互信頼を文字として歌っていることが記されています。詩編を読むこと、詩編を学ぶことの意味は「遮られた目」を「癒すためのお薬」と言っても過言ではないでしょう。

(6)今日の聖書箇所のお話は続いています。二人の弟子は道で出会った人（つまり、イエス様）とエマオの村の宿泊場所で夕食を共にします。30節31節を見てみましょう。〔(24:30)一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。/(24:31)すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。〕劇的な瞬間が記されています。30節は「聖餐式」のことが書かれています。単なるパンと祈りにその様な力があるのでしょうか。…私は運動で弓道、弓を引いています。弓を引き絞り、体が縦横十文字に伸びてその調和の極限に矢が放たれるのです。物体としての矢が飛んでゆくものではありませんが、心身融合の調和として矢が放たれるのです。神学では、パンとぶどう酒（私たちの教会ではぶどうジュースです。コロナ禍では、パンもぶどうジュースも、口に入れずに心の中で受け取っています。）が聖なる物質に変わるのか否かと言う神学論争がありますが、パンはパンのままであり、ぶどう酒はぶどう酒のままであります。併し、主の復活を信じる人にとっては、主の復活を信じる人生にとっては、聖餐のパンとぶどう酒は生きる源となるのです。そのことを言葉で表現すれば32節に記されているように〔(24:32)…わたしたちの心は燃えていたではないか、と語り合った。〕ともなります。主の復活を信じる人生は私たちが天の国に行く時まで、その瞬間の時まで継続いたします。その様な人生を歩んで参りたいと願っています。

・・・お祈りいたします。